

少年サッカー指導法について
About lesson method of juvenile soccer
1J02C1717 徳永悠平

主査 山崎勝男先生 副査 堀野博幸先生

【はじめに】

今日の日本の少年サッカーはJリーグやワールドカップの影響もあり、以前より拡大し続けている。しかし、未だにその中で様々な指導における問題点が生じているのが現状である。本論文は、現在の少年サッカー指導の現状や状況を調査し、少年サッカーの指導の在り方を明らかにすることで、今後の日本のサッカーのレベルを向上するにはどうしたらよいかを知ることが目的である。問題点の解決法をもとに、チームにおける「コーチ」の必要性と、望ましい「コーチ」のあり方を検証してみた。本論文は、少年サッカーに関する資料や文献を参考に行なった。

【第1章 少年サッカー指導の現状】

日本の少年サッカーの規模自体は急速に拡大する傾向にある。それに伴ってサッカー少年を指導する指導者も急速に増加した。しかし、果たして数字で見られるだけの発展を、内容的にも満たしているのだろうか。急速な発展の中で、指導者は様々な悩み、迷いを感じ、そうした迷いから、指導に何らかの問題が起こっていると考えられる。また、多くの指導者がサッカー未経験者であること、そして経験者であっても、少年期にはそぐわないような、いわゆる旧態依然とした体育会系の部活のような精神論、指導の押し付けが行われていたりするのである。こうした指導が少年サッカーに限らず、日本の国内の少年スポーツ指導、スポーツクラブに限らず部活動などの学校体育の指導の場においては依然数多く見られるし、現在指導を受けている子供たちからも多かれ少なかれそうした問題が聞かれる。

【第2章 指導における問題点】

少年サッカー指導の問題点の一つに「勝利至上主義」の指導が挙げられる。少年サッカーのチームの場合、組織構造と、メンバーの意識と、様々な外的要因も影響した3重の相乗効果によって、「勝利至上主義」という組織文化は深く根付いてしまったのだと考えられる。少年サッカーでは子供の意欲を妨げぬよう十分に注意を払いながら、自由

に楽しくサッカーをさせ、その中で技術を常に磨かせることが大事である。また、チームの組織管理や組織作りも問題の一つである。依然として指導者の専制的な組織管理になっているのが現状である。

【第3章 問題への組織論的アプローチ】

まず、チーム内に存在する「勝利至上主義」の組織文化を「技術至上主義」、「楽しさ至上主義」という組織文化に変革していく必要があると考える。そして、変革した組織文化が深く根付き、「勝利至上主義」の文化が再び支配しないような組織づくりが必要となる。それがつまり古典的組織管理からの脱却とダイナミックな組織作りである。また、いいチーム、いい組織づくりのためには、指導者にあたる監督とコーチの基本的な役割を、明確に区別する必要があると考える。チームの指導者には監督だけではなく、コーチの存在が不可欠であると考ええる。

【第4章 指導者の組織論的役割】

チームにおいて、監督、またコーチが、チームにおける組織開発のプロセスに関わるコンサルタントについて理解していなければ、環境の変化にも十分対応したチームが出来上がらないと言える。また、チームによって、子供のもつ基本的仮定も、環境も様々な異なるので、指導も指導者がそれぞれの環境に適した在り方を見つけることが大事であると言える。

【おわりに】

サッカーは常に変化しており、その移り変わりによってサッカーの指導の在り方も変化する。もちろん少年サッカーの指導の在り方も変化するのである。よって、本論文で示した少年サッカーの指導の在り方のすべてがこれからも正しい指導の在り方であり続けるとは必ずしも言えないが本質的な部分は変わらないであろう。また、日本サッカーの発展のために少年サッカーの指導の向上は不可欠であり、子どもが成長していく以上に指導者も常に指導の在り方を学んでいかななくてはならないと言える。